No.420 平成19年6月1日

# 杉五だより

杉並区立杉並第五小学校 TEL3392-6528

## アヒルの思い出

副校長 土 上 智 子

杉五小に赴任して2ヶ月、杉五小の素晴らしさをいろいろ発見している毎日です。その一つに高学年の子ども達の低学年の子ども達に接する態度があります。例えば、休み時間に6年生がとても上手に1年生を遊んであげています。当番かと思って聞くと、「違うけど、かわいいから。」という答えが返ってきました。また、掃除の時間にも6年生が1年生に教えて仕事を任せながら、でも大事なところはそっと助けてあげています。心が温かくなる、とてもほほえましい光景です。

さて、話はかわりますが、私は以前にアヒルを飼っていたことがあります。どこかの縁日に行った時、出店の一つでピイピイ鳴くひよこをみつけました。近寄ってみると、ニワトリのひよこではなく、くちばしは平たくて先は丸く、足には水かきがついているアヒルの子でした。あまりのかわいさに、私は衝動買いをしてしまいました。家に帰って試しに洗面器の水に入れてみたら、本当に浮かんで、アヒルのおもちゃのようにすいすい泳ぎます。それはそれは愛らしい姿でした。

大変だったのはそれからでした。アヒルは生まれて最初に見た動くものを親と認識するそうです。ふ卵器で生まれた彼女が最初に見たのは人間だったようで、人間である私を親だと思っているようなのです。ですから、私の姿がみえなくなると大きな声で鳴き続け、私が顔を見せるとぴたっと鳴きやみますが、また見えなくなると鳴き出すといった始末なのです。私は、連れて歩ける限りはアヒルの入ったかごを持って出かけ、どうしても持っていけないときは、自分の親などにお願いして預けていくという生活をしなくてはならなくなりました。

ある日面白いことに気づきました。鳥かごから出して、部屋の中に放しておいたときのことです。床に座っている私の周りをヨチヨチ歩いているのですが、私の後ろに行くと例の「ピーイッ！ピーイッ！」という親を探す鳴き声をあげ、前に廻ってきて私の顔を見ると鳴きやみます。そして、勝手にまた後ろに廻ってまた、「ピーイッ！ピーイッ！」と私を探すのです。私が振り返って顔を見ると鳴きやみ、前を向いて顔が見えなくなるとまた鳴き出します。このことから、私のアヒルの子は人間の体全体を親と認識していたのではなく、人間の顔だけを親と認識していたのだということがわかりました。

そんなアヒルの子も数ヶ月後には羽が生え変わり、声変わりもして「ガアガア」と鳴くようになりました。体も大きくなり、さすがに家の中の鳥カゴでは飼えなくなったので、父に頼んで庭の隅にアヒル小屋を作ってもらいました。もちろんその頃には彼女もすっかり自立して、私の後を追うことはなくなりましたが、代わりに私の姿を見ると、「えさをくれ」とひときわ大きな声で「ガーアッガーアッ！」と鳴くのには参りました。

子ども達は親や周囲の大人からいろいろなことを学んで成長していきます。杉五小の6年生の行動は、自分が1年生の時にしてもらったこと、自分の先輩の姿を見て、そして根本は親や周囲の大人達が自分達に接する態度を見て培われてきたものだと思います。

親の苦労する姿を子どもに見せるべきではないと言われることもあるようですが、私は、親は子どもに対し一人の人間としていろいろな姿を見せるべきなのではないかと思っています。親の仕事をしている姿、苦労している姿等を見て育てば、子どもはわがままを言わなくなり、自分も何か役に立ちたいと思うようになるのではないでしょうか。また、趣味をもち楽しんでる姿、何かに夢中になっている姿等を見れば、子どもも自分なりの楽しみを見つけ、心豊かな生活ができるようになるのではないでしょうか。

教師も同じです。先生として子ども達に対しきちんと指導することも必要です。しかし、一人の人間として、人生の先輩として、本音の部分で子ども達と接することも必要なのではないでしょうか。私が飼っていたアヒルの子は人間の顔だけが親だと思い違いをしていましたが、周囲の大人が子ども達に接するときは上辺だけ、一面だけでなく、一人の人間の全体像として生き方を見せていくことが大切だと思っています。そのことが子ども達の職業観、人生観を育み、ひいては豊かな人間性を培っていくことになると思います。キャリア教育の重要性が言われていますが、その第一歩は子ども達を取り巻く大人達の生き方だと思うのです。

これからも、杉五小の子ども達のよいところをさらに伸ばしていきたいと思っています。